

令和6年度 第2回 千代田区教育ICT推進委員会 会議録

日 時 令和7年2月18日（火） 午前9時00分～午前10時30分
場 所 千代田区役所 4階 教育委員会室

議事日程

開会

あいさつ 千代田区教育委員会 教育長 堀米孝尚

意見交換1（今年度の取組について）

意見交換2（来年度に向けて）

事務連絡

閉会

出席者（10名）

信州大学 教育学部 准教授	佐藤 和紀
山梨大学 教育学部 准教授	三井 一希
お茶の水小学校・幼稚園児童保護会 会長	原 直樹
麹町中学校 地域コーディネーター	杉山 充洋
九段中等教育学校 P A 会長	岡野 誠
富士見小学校 校長	小牧 来太
神田一橋中学校 校長	盛谷 樹
九段中等教育学校 統括校長	野村 公郎
教育委員会事務局 子ども部 教育担当部長	大森 幹夫
教育委員会事務局 子ども部 指導課長	上原 史士

区側（1名）

教育長	堀米 孝尚
-----	-------

事務局（4名）

統括指導主事	内山 宝
管理係長	佐橋 俊亮
指導主事	相場 奨太
主事	松浦 洋介

委 員 長

皆様、おはようございます。本日はご多用のところ、ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。ただいまから第2回千代田区教育ICT推進委員会を開会いたします。

本日、信州大学の佐藤先生、山梨大学の三井先生、九段中等教育学校 P A 会長の岡野委員は、オンラインにてご出席いただいております。

教 育 長

また、原委員は、少し遅れての出席となります。

なお、前回に引き続き、議事要旨を作成する都合上、本会議は録音させていただきますので、ご了承をお願いいたします。

それでは、初めに、教育長の堀米より皆様にご挨拶をいたします。

教育長、よろしくお願いいたします。

委員の皆様、おはようございます。着座にて失礼します。教育長の堀米孝尚と申します。

本日は大変ご多用のところをお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

G I G Aスクール構想の本格運用も、4年目を終えようとしております。全国的にも、N E X T G I G A、セカンドG I G Aに向けて、様々な取組や準備をしているところです。

私自身、本区で4年目が経ちます。まさにG I G Aスクール構想の実現に向けて推進をしてきた4年間でもあります。4年前に比べますと、子どもたちのI C Tスキルが大幅に向上しているという実感はあります。ただし、自治体格差とも言われていますし、千代田区の中でも学校間での格差、また、学校の中でもクラスでの格差が多少あるのではないかなという危惧も同時に持ち合わせております。

これから、ますます予測困難な、変化の激しいV U C Aの時代とよく言われますけども、一層、情報モラルを含めた情報活用能力の育成やメディアリテラシーが重要になってくると思っております。

本区でも、先月行われた来年度の教育課程届出説明会におきまして、改めてI C Tを活用した教育の一層の推進と、メディアリテラシーの育成強化をお願いしているところでございます。本日はどうぞ忌憚のないご意見をいただき、活発な意見交換の場にさせていただきますと幸いです。

結びになりましたが、皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げて、挨拶とさせていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

委 員 長

教育長、ありがとうございました。

堀米教育長は、次の公務のため、ここで退席させていただきます。

(教育長は公務のため退席)

委 員 長

続きまして、まず、本日の資料の確認をさせていただきます。

本日の資料は、事前にデータにて共有しております。また、お手元のパソコンでも適宜ご確認ください。

それでは、早速、意見交換に入っていきたいと思います。本日は前半で今年度の取組について、後半で来年度に向けて、意見交換を行っていきたいと思います。

では、前半、今年度の取組についての意見交換、こちらを、まず、事務局より報告後、各校長先生より補足説明等を頂きます。

では、事務局、お願いいたします。

はい。事務局の相場から、今年度の取組についてご報告させていただきます。

まず、4年連続で実施しております本区における情報活用能力に関する実態調査の結果から、成果についてお話しさせていただきます。

中学校・中等教育学校の結果から、特に3つの設問に注目しました。3項目とも年々向上し、4年間で10ポイント以上の向上が見られました。中でも、4番の「目的に応じてアプリを使い分けることができる」と、10番の「コンピュータを活用して、友達と意見交換したり、共同で資料や作品を作成したりすることができる」という項目は、「ちよだスマートスクール」が目指す学び、方向性の「子ども自身が学習方法を決める学び」と、「子ども同士がつながる学び」に位置すると認識しています。

小学校高学年では、ほとんどの子どもたちが写真や動画作成、キーボード入力など、基本的なICT活用のスキルが身に付いていることがうかがえます。

小学校中学年は、昨年度、22項目中19項目が前年度結果より低下していましたが、今年度は21項目が向上しました。21、22番の設問から、アウトプットを多く取り入れた授業改善が行われたことが分かります。また、10、11番など、情報モラルに関する設問も向上しました。これらは、先生方の日々の指導の積み重ねや授業改善の結果だと認識しております。

さらに、今年度から、区の施策として、「ちよだスマートスクールの日」を各学校で設定し、保護者や地域の方々にICTを活用した授業公開をするとともに、講演会や意見交換などをする取組を行ったことや、年度初めに情報モラル教育強化月間を設定したことも、向上した要因の1つと考えております。

次に、課題についてです。小学校高学年の結果から、プログラミングを一層充実していく必要があると感じております。小学校低学年の結果では、年々低下しているこの2つの項目が気になるところです。8番の設問から、情報収集の手段として、低学年段階から様々な手段があることを学習活動を通して指導していきたいところです。中学校・中等教育学校の結果から、様々なメディアの特徴を理解し、確かな情報を見極める力など、リテラシーを高める指導の必要性を感じます。

そこで、これらの結果も鑑み、来年度は、「ちよだリテラシー教育」の推進として、情報を読み解き、自己の信念に従って行動できる人を目指し、国語科を中心とした言語能力を育む指導など、現在も行っている5つの取組をより一層充実させ、批判的に読み解く力など、7つの力を育成していきたいと考えています。

最後に、幾つか紹介させていただきます。

まずは、九段中等教育学校が、生成AI大賞2024において、応募総数139件から最終8組に選出され、ほか7組が企業の中、唯一の学校として、優秀賞を受賞いたしました。また、国のリーディングDXスクール事業の成果報

告会では、ポスター発表に加えて、パネリストとしても成果報告させていただきました。パネルディスカッションでは、佐藤先生にお世話になりました。

さらに、九段中等教育学校では、英国大使館とサイバーセキュリティの連携授業を実施いたしました。

先週の金曜日には、本区の情報教育推進校である神田一橋中学校の研究発表会が行われました。ここでも、佐藤先生には3年間にわたりご指導いただき、当日は基調講演をしていただきました。改めて、お礼申し上げます。ありがとうございました。

事務局からの報告は以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。

ただいまの事務局からの報告を踏まえ、各校長先生方から補足をお願いしたいと思います。

初めに、野村校長先生、お願いいたします。

野村委員

はい。よろしくお願いします。

本校では、昨年度に引き続き、今年度も生成A I のパイロット校の指定を受けています。また、今年度から、教育D Xハイスクールの指定を受けております。また、E－A s s e s s m e n t に関するものということでの指定も受けておりますけれども、こういった取組に従って、本校でも生成A I あるいは教育D Xに取り組んでいくということになります。

今年度、システムの変更があったものですので、一時期、タブレット等がなかなか使いづらい状態があったんですけども、昨年末、12月には完全にシステムを変更しまして、今では新しいシステムに伴って、各教科で全て使用しています。先ほど生成A I 大賞2024において優秀賞をもらっている、全国からいろいろ大手の企業なども参加しているところなのですが、最終の8組に選出されたということで、そちらの賞も受けたということで来校者も多く、本校に今年度来校した数でいきますと、1月25日現在、自治体等で14組52人、それから、学校等は北海道から鹿児島まで27校57人。のべ109人の方に来校いただきました。本日も実はパラグアイの記者が来校していて、外務省の報道官も一緒に来ているということで、さらに受入れの数が増えている現状です。これは大賞を取った後の問合せが多いということもありますけれども、文部科学省に問合せをする自治体や、あるいは海外からのお問い合わせも多いということで、その場合に、本校は文部科学省から近いということもあり、こういった取組をしていることで紹介を頂くということで、非常に他県の議会ですとか教育委員会も来ているという状況になります。

そこで本校の生徒の取組を見ていただくことで、生徒の励みにもなりますし、本校での何よりの強みは全ての教科で取り組んでいるということかなと思います。ほぼ全ての教科の中でタブレットを活用して、特に生成A I ですね、これは1年生から6年生まで、システムの変更に伴って活用できるよう

になっているんですけれども、そういったものを活用しながら、授業の形態もいろいろと変わってきておりますので、来校者の方々も非常にその辺りについては注目をして、自分が高校時代にこんなことを受けられたらよかったな、なんていうような感想をもちながら皆さん帰られていますけども、こういったものがどんどん広がっていくのかなと思っております。

私からは以上です。

委 員 長

はい。ありがとうございました。

次に、盛谷校長先生、お願いいたします。

盛 谷 委 員

はい。神田一橋中学校の盛谷と申します。よろしくお願いいたします。

まずは、先ほど紹介いただきました、先週末、2月14日に研究発表会をさせていただき、ありがとうございました。佐藤先生には、3年間にわたり、本当にご丁寧にご指導いただきまして、ありがとうございました。

研究の中心として据えているのは、まさしく、この会の話になりますけど、「ちよだスマートスクールを活用した学び方、教え方、働き方改革の推進」というテーマで研究を進めてまいりました。特に、佐藤先生からは、授業観の転換ですね、教えるという授業から生徒が学び取る授業へしっかりと変えていきましょうという話からスタートいたしました。生徒の資質、能力をしっかりと向上させていくことで、将来にわたって、学習者として学び取ることができる生徒の育成を主眼に置いて取り組む必要があるという、ありがたいお話をいただき、教員もそれに向かって一生懸命取り組んだ3年間でした。

その中で、やはりICTの活用を行うことで、今まではどうしても一斉授業のほうが効果的だったものが、ICTを活用することで、生徒それぞれが自分たちの思いやペースを基に、学習を進めることができるという、そういう時代になってきているからこそ取り組めた研究だと思っております。その中で、個別最適な学びや協働的な学びをしっかりと授業の中に取り入れて、新しくこの授業の変換を行っています。学び取る授業へ変えていく取組を進めてまいります。

その中で、様々なアンケートや全国学力・学習状況調査にも本校生徒の意識とか態度の高まり、向上が見られたというのは非常によかったと思っております。本人たちの意識がとても前向きになっている状況ですので、引き続き研究を進めていきたいと思っております。また、千代田区全体でそういう取組をリードできるような学校として、今後も取り組んでいければと思っております。

そんな話の中で、働き方改革を進めるというのも大きなテーマでしたが、これは、Teamsを活用してクラウドを活用した取組というのが中心でした。これからは、もう一歩リードして、いろんなところにAIを入れて、作業を効率化したり、様々な取組をもう一歩進んで行っていかないと、校務を改善して働き方を改革するというのは難しいなという現状もあります。千代

田区全体としても、そういう課題が今後出てくるのかなというところがあります。

最後です。先ほど話がありましたが、「ちよだリテラシー教育」の推進を来年度の取組の中心として据えるというお話でした。本校の研究でも、やはりアウトプットをいかにしっかりできるか、自分の思いをしっかりと文章の形にして、アウトプットできるかというのは、なかなか向上できていない部分でもありますので、先ほど国語の授業を中心という話がありましたが、アウトプットであったりとか、その他、情報モラルであったりとか、先ほど話をした学習についても、A I の活用を進めていければなと思っていますので、そういった様々な力を育成しつつ、全体でリテラシーの推進を進めていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。

次に、小牧校長先生、お願いいたします。

小牧委員

はい。富士見小学校の小牧でございます。よろしくお願いいたします。

まず、先週の神田一橋の発表、本当に学ぶべき点がたくさんあって、勉強させていただきました。それとともに、また、本校の目指すべき点と同じだなというふうに感じております。小中のつながりも感じられました。本当にありがとうございました。

本校の今年度の取組ということでお話しさせていただきます。取り組む前に、まず、このICTを使ってどのようなことを進めていくかということ、もう一度、全国学習・学力状況調査を見て考えていきました。

これは本区の特徴だと思うんですけども、学習を平日にどのくらいしていますか、という設問です。3時間以上が60%、本校でも60%以上なので、千代田区の各小学校もこのぐらいの状況なのか、2時間以上しているというふうにみると76%なので、すごい値だなというふうに感じています。

次ですけれども、学習塾の先生や家庭教師の先生にはどんなことを教わっていますかというんです。学校の勉強より進んだ内容や難しい内容を教わっているというのが63%。だから、学校の勉強で教わることが初めてじゃなくて、しかも発展的な内容をもう半数以上の子がやっているという状況です。

次です。それ以外に、タブレットをどのぐらい勉強で使っていますかということも、東京都と全国を見てみると、かなり高い数字がありました。

なので、こういう千代田区の小学校の現状を見て、何が必要か、何をICTで大切にしていくかということを考えながら、今年度、進んできました。

それで、先ほど相場指導主事からご報告があった情報活用能力調査。これは千代田区の全体では出していただいているんですが、各校というふうには出ていなかったんで、ICTの支援員さんにも協力していただきながら、低学年、中学年というふうに本校の状況を分析してみました。

当たり前ですけど、キーボード操作は、低学年、中学年、年代が上がるに

つれ、技能が身に付いています。

次、本校が、先ほどの調査からも大事にしようとしている協働だったり、意見交換なんですけど、青が肯定、オレンジまでは肯定的評価だと思うんですが、少し高学年のほうは75ぐらいなので、肯定的が増えているんですが、さほど私の感じだと変わっていないのかなというふうに思いました。

次、これ、比較関連なんですけれども、これも少し最初の肯定ですね、当てはまるというのが増えたけれども、2番目の肯定的評価はあまり変わっていないという状況でした。重点に置いているにもかかわらず、なかなかやっぱここは子どもたちのほうに進んでいっていないのかなということで、今年度を踏まえて、本校の研究なんですけど、他者と自由に相談する自己選択、自己調整というのを経営方針に掲げながら、来年度もやっていこうと思っています。あとは、比較関係付ける、学習方法の選択、試行錯誤する時間というようなものを、今年度とともに重点に置いていければと思っています。

それをする中で、先ほどリテラシーの話がありましたけれども、批判的に読み解く力、または自分の考えを形成する力、千代田区が推進しているこのような力が備わっていくんじゃないかなというふうに考えております。

今年度の取組は以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。

ここまでの事務局からの報告と各校長先生からの補足説明について、学識の先生方からコメントを頂きたいと思います。

まず、佐藤先生、よろしくお願いいたします。

佐藤委員

皆様、おはようございます。信州大、佐藤でございます。先日、神田一橋中で大変お世話になりました。ありがとうございました。改めてお礼申し上げます。私からは、神田一橋中でお話をしたことを改めて説明したいと考えております。幾つかあるのですが、大きく分けて、2つお話をいたします。

1つは、自己調整学習とか学習者主体の授業に関わって、当日は、こういうスライドでお話をしました。AからHにかけて、先生が制御するのか、子どもが決定するのかというスタイルの授業の話でございました。当日の神田一橋中学校の授業では、CとかEとかBとか、その辺のスタイルが見えたなと思っています。いずれにしても、内容とか学び方や進め方を子どもたちが何らかの評価の中で決めていくというようなことですね。Aはあまりもう見られなくなったかなという印象を受けています。Hみたいな話になると、本当に個人で探究していくようなスタイルですね。例えば、研究をするとか、夏休みの自由研究というのがHのスタイルなわけですが、そういったことは、学校の教科の中ではなかなかしにくいので、B、C、Eぐらいな感じで大体やられるというふうに僕は捉えています。

そういった形で、何かタイプを決めて、学習者主体の授業をしていただければというふうに考えているところでございます。そうじゃないと、やっぱ

り、教科によって、ここは難しいんだという話になりやすいんですね。それは、どういうことかという、全部、Hでみんな考えちゃうからなわけですが、カリキュラムが決まっています、教科書が決まっています、学習指導要領が決まっているという制限の中で、どういうふうに子どもの主体性を発揮させるかというのを考えたときには、なかなかHにはなりにくいというような、そういうことを鑑みてやっていくといいんじゃないかなと思っています。

その中で、先ほど相場指導主事が情報活用能力の話をしていたんですけども、子どもが自分で進めていく、決定していくというタイプになったときに、ようやく情報活用能力とかの意味とか、情報端末の意味が出てきますし、この必要感が生まれてくると僕は考えています。何でもかんでも先生が制御をして、こうやります、ああやります、この教材をやります、こういうふうに進めていきますというふうにやっているときというのは、実は、情報端末というのはあんまり意味がないというか、必要感を覚えないんですね。これは、先生も子どもも一緒です。それから、情報活用能力を発揮しようとか、育成しよう、例えば、単純にタイピングのスキルを伸ばそうみたいな話になったときに、これも先生の制御でずっとやっている状態ということが続けていけば、そんなにタイピングを練習しようという気にもならないですし、そういう必要というのになかなか起きないわけですね。先生のペースでやっていけばいいわけですから。ですけど、コンピュータというのは、どんどんどんどん効率的にやっていくシステムなわけですから、もう自分でどんどんどんどん進めていこうみたいな主体性が発揮されない限り、コンピュータのスキルを伸ばそう、タイピングのスキルを速くしようなんて話にはならないわけですね。

ですから、何らかの決定を先生方がするじゃなくて、子どもがしていくというようなタイプの授業にしていかなきゃいけないというふうに僕は考えていますし、それは、情報活用能力や情報端末の活用と相関関係にあるんだというふうに考えていただくといいんじゃないかなというふうに考えています。それが1つ目のお話でした。

2つ目のお話なんですけども、子どもの学習態度と主体性の話ですね。左側のほうは、これまでの制御が多かったタイプの授業の話なんですけども、仮に、先生方の授業が「うまい」と「うまくない」というふうに分けてみました。うまいという方は当然成果を上げるわけなんですけども、うまくないという状態のときは、成果事実はあるけど、成果が上がらない。つまり、教えたけども理解しないとか、できないとかという状態のときですね。こういう状態があったときに、この状態から学習者主体の授業にもっていこうというような話になった場合、どういうことが起きているかということなんですけども、当然、上のほうは、高い指導技術が一人一人の学習を支援するわけですね。これはもう明白です。そして、安定した学級経営が協働的な学びを支えたりもしています。これも明白です。ですけども、うまくない方が学習者主体の授

業にしていこうみたいな話になるときは、うまくないことが際立っていきます。つまり、子どもにあんまり指導していないので、一人一人への指導が入らなかったりしていきます。だから、自習と言われるわけですね。それから、子どもの学習態度の悪さが際立っていきます。そうなってくると、教えた事実もなくなっていくしますので、ここの右にシフトしていこうみたいな話にはならないし、シフトしたがる先生が多いなという印象をもっています。

ここにICTを入れていくと、どうなるかという、左上の成果を上げていく先生方は知能、技術がそもそも高いので、指導効率が上がって、子どもたちにどんどん効率的に教えていけるようになっていきますが、そんなにうまくない先生はICTを邪魔なものというふうに見いだしてきたなという印象をもっております。

そういった中で、学習者主体の授業をしていくときに、成果を上げてきた先生方は、子どもの自立を支援したりとか、子どもを、より一人一人をみとっていくということに支援されていくようなICT活用ができて、非常に便利なものになっていくわけですが、一方で、そんなにいい状態ではないところが使うと、子どもたちの遊びに使われていくという状況が生まれていきます。ICTを配った、情報端末を配ったら、子どもたちが授業中にインターネットをやり始めたんです、知らない何か遊びとか学習とか、全然違うことをやり始めたんですというふうに言ったりする先生とかがいるんですけども、それはあなたがそれをきちんと指導できないんでしょ、みたいな話にすぎないというふうに僕は捉えております。

こんなふうに考えていただくと、いろいろと見えてくることがあるかなと思っております。これまで大事にされてきたことはあまり変わらないんじゃないかなというふうに思っていますし、そこに道具が登場したことによって、より拡張される、それがうまくも悪くも拡張されていくというような状況が生まれているなという印象でおります。

私からは以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。

次に、三井先生からコメントを頂きたいと思います。よろしくお願いいたします。

三井委員

はい。よろしくお願いします。改めまして、おはようございます。山梨大学の三井でございます。私からも、ただいまの発表について少しコメントができればと思っております。

先ほどご報告いただいたこちらのグラフを見ますと、やっぱりこのGIGAスクール構想の着実な成果が出ているなといったことを感じております。もちろん、質問項目によって、上がり下がりというのは当然あるとは思いますが、例えば、こういった当たり前にキーボードなどで文章を打つことができるのか、目的のアプリを使い分けることができるって、本当に基盤としての使い方だと思うんですね。これによって授業がどうかとか、教科

の質のよさがというよりも、これがあるから次の段階へ進めるということがあると思いますので、ぜひ、この数値に満足することなく、さらに向上を目指してほしいなとも思いますし、キーボードなどで文章を打つことができるといっても、その打つも、様々だと思うんですよね。1分間に100文字ぐらい打てる子もいる一方で、1分間に30文字でも打てると認識している子もいるかもしれませんので、そういった質を高めていく、量を増やしていくみたいなところを、また来年度以降取り組まれるといいのかな、なんていうことは感じておりました。

また、このちよだスマートスクールといったものが千代田区の特徴なのかな、なんてことをここ数年感じております。ここにも、この資料にもあるとおり、SAMRモデルですね、デジタル化をした後に、代替、そして、増強、変革、再定義等へ向かっていくと思います。そもそもアナログであったものをデジタル化することは、つまり、代替ではないかなと思っております。そこからデジタル化するからこそ、増強や変革や再定義の方へつながっていくのかなと思っておりますので、デジタル化するだけで満足することなく、その先のA、M、Rというか、段階も出していくところがより求められてくるのかなと思っております。これも、デジタル化したからって、自動的にAやMやRに行くなんてことはあり得ないわけですね。先生方の授業デザインも必要になってくると思いますし、何より子どもたちが力をつけていかないと、MやRの段階ということはなかなかいかないのかなと思っております。でも、デジタル化した先には、MやRといった可能性が広がっていると思いますので、ぜひ、子どもたちの力を高める、これまで身に付けられなかった資質能力を高めるとか、これまでできなかったような授業を実践していく上でも、ぜひ、MやRみたいなこと、授業デザインを変容させるとか、ここに書いたような実社会の課題解決とか、新たな価値の創造へつなげてほしいなと思っております。また来年度以降に期待しております。

それから、こちらのプログラミングですね、私も少しこれが気になっております。このプログラミングって、体験をするということが極めて大事なのかなと思っております。知識としては身に付いていても、何でプログラミングするかというところですよ。別にプログラマーを育てる必要はないとは思っています。結果的にプログラマーができれば、ありがたいことだと思いますけど、小中学生の学びって、やっぱり体験を通じて学ぶということが極めて大事だと思います。お米作りを体験したからといって、別に農家を育てているわけではないですよ。お米作りを体験することで、私たちが普段食べているお米って、どうやってできているのかなということを体験を通じて学ぶとするならば、プログラミングも全く同じことが言えて、私たちの身の回りで動いている機械って、どうやってなっているのかなと。その一端をプログラミングというものを通じながら学ぶ、また、そういったものを通じて、プログラミング的思考を育むとするならば、ぜひ、体験格差が生じないように、意図的にプログラミング教育を仕組むといったことを、ぜひ、来年

度以降、重点的に取り組まれることがいいのかなと思っております。情報活用能力には、このプログラミング的思考といったものも入っていますので、ぜひ、こういったものの強化をお願いしたいなと思っております。

また、この「ちよだスマートスクールの日」の講演会とか意見交換ですね、保護者の理解を深めたりとかする点で、非常に効果があるなと思っております。保護者に応援団になってもらうといったことが、家庭での子どもたちへの働きかけにつながると思いますし、学校と保護者が一緒になって、子どもたちの教育に当たっていくといったところですね。このGIGAスクール構想って、保護者自身が体験してきたことがないわけですよ。保護者が小中学生のときに1人1台はなかったわけですから。実際、まだまだイメージが湧かなかつたりとか、これによって何やっているんだろうみたいなところというのは、繰り返し繰り返し、毎年、保護者と共通理解を図っていくということがとても大事なのかな、なんてことは感じております。

この繰り返し繰り返しといったところでいったら、まさにこれかなと思っております。これ、何で年々数値が下がっているんだろうと思った場合、これは私の考察でしかないので、実際、ちょっと分からないんですけど、GIGAスクールが始まった当初って、IDとかパスワードって、かなり慎重に指導したりとか、こういうものだよと、先生方が意図して指導してきたところが大きいと思うんですけど、だんだんだんだんそれが当たり前になってくる中で、子どもたちもあまり意識しなくなって、先生方も意識しなくなってみたいところもあるのかなとするならば、やっぱり、毎年、分かっていたとしても意識させるといったような指導とか、意識させるような活動とか、そういったことを仕組んでいくということが大事だと思います。

ここの数値からは、もう無意識化していて、あまり意識していないというふうに捉えることもできるんじゃないのかなと思っているんですよ。もうそれが大切に管理するということが当たり前過ぎて、わざわざその意識が上がってこないから数値が下がったといった考察もできると思いますし、先ほど述べたように、児童・生徒も先生もあまり意識しなくなってきて、先生方も指導しないし、子どもたちもそれほど意識せずにやってしまっているみたいところもあると思いますので、ぜひ、こういった大事なことというのは、毎年繰り返し指導していくということが必要になってくるのかな、なんてことは感じております。

最後、先ほど校長先生からご報告あったみたいに、子どもたちが学校外で発展的な内容を学んでいるというのが60%を超えているみたいところは、やっぱり千代田区ならではののかななんてことも思ったんですけど、実際、こちら、文部科学省が全国の学校に対して行った調査の結果でも、まあ、60%まで行かないまでも、似たような傾向は出ているわけですね。例えば、これ、5番以降を見てもらうと分かると思うんですけど、「授業の内容が難し過ぎる」と思うのは30%ぐらいですね。「進み方が速過ぎる」という子が約20%、「内容が簡単過ぎる」が15%、「進み方が遅過ぎる」ということが

13%ぐらいですね。つまり、全国平均をしても、これぐらいの子たちが1つの教室にいるとするならば、そういった子たちに対して、一人一人に学びがある授業って何だろうみたいなことを考えたら、やっぱり一斉授業の限界も見えてくると思いますし、より個別最適な学びの中で、どう授業をデザインするのかみたいなことが必要になってくる、大事になってくるのかなんてことは、改めて感じました。また来年度以降に期待したいと思います。

私からは以上です。

委員長

ありがとうございました。

次に、これまでの報告等を受け、保護者代表の方々からご感想等を伺えればと思います。

初めに、杉山委員、お願いいたします。

杉山委員

麹町中学校の地域コーディネーターの杉山でございます。お話、いろいろありがとうございました。

いろいろと聞かせていただいて、やっぱり東京、日本の中心地、千代田区の出組、このアンケートの数字等を見て、やっぱり高いなというふうに、リテラシーが高いなというふうに感じました。子どもたちのこういった環境、当たり前ではないというのがあると思うんですけれども、子どもたちのますますの可能性に期待したいというふうに思っています。

また、先ほどお話に出ましたけれども、IDとかパスワード、こういったところは、私も会社でいろいろと情報セキュリティの委員等もやっているんですけれども、この辺りも重要だというふうに思っておりますので、こういった管理とかこういったところも、先生、保護者も含めて、徹底していければというふうに思っております。ありがとうございます。

委員長

ありがとうございました。

次に、岡野委員、お願いいたします。

岡野委員

はい。本日はウェブから失礼しております。各校長先生、それから大学の先生の方々の発表を聞いて、本当にいつもありがたいことだなというふうに、一保護者として感謝しております。

その中で、3つ、私からお話しさせていただきたいんですが、まず1点目が、まさに今やっていることが、新しいことにチャレンジして、課題を発見して解決するという我々の探究にもなっている。この姿を子どもたちに見せられているというのは、非常に大きな背中を見せる経験になるのかなというふうに思っております。非常にありがとうございます。

2点目が情報モラルについてなんですけど、情報モラルや情報リテラシーというお話が前回の委員会の中でもお話が出ていたんですが、今回の中ではあまり出てこなかったのが、前回以降どんな改善がされていて、現場は今どんなふうに動いているのかをもう少し知れたらありがたかったなというふうに思っております。例えばなんですけど、保護者の中でお話していると、学習を、一昔前、我々の世代は教科書でどこのページに載っているかなと調べていたと思うんですが、これをウェブだったり生成AIだったりで、すぐに

物理の公式を見ていく。これのメリットって、スピード感だと思うんですが、逆に、デメリットというのは、やはり取捨選択できる能力があるかどうかという、そういったところにもつながっていくのかなというふうに思っております。こういったところの情報リテラシーとかモラルを子どもたちにも高めていただく必要があるのかなと。情報の取捨選択がしっかりできるようになれば、よりよくなるのかなと、そんなふうに思ったのが2点目です。

最後、3点目なんですが、先ほど佐藤先生、三井先生、両方の方からあったように、やはり学習態度が低くて、子どもたち主体だとICTを遊びに使ってしまうとか、三井先生のお話だと、子どもたちの差があるから、どうしても一斉授業の限界があるんじゃないかと、個別最適をさらに進める必要があるんじゃないかというお話がありましたけれども、全く同意見でございます。教職員の現場の先生方にはより大変なことをお願いするのもかもしれませんが、ぜひ、子どもたちのためにより一歩進めていただいて、代替で終わらず、増強、変革、再定義まで進めていただけたら、保護者としては非常に喜ばしいことだなと、そんなふうに感じておりました。

以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。

ここまでで、前半の今年度の取組について、意見交換を行わせていただきました。次に、後半の来年度に向けての意見交換に入らせていただきます。

後半については、12月末に国から校務DXに関する調査結果や、生成AIガイドラインの改訂版、諮問などが出されましたので、そのことを踏まえながら、来年に向けて意見交換を行えればと思います。

はじめに、事務局から報告をお願いいたします。

指導主事

スライドにお示ししているとおり、令和6年12月26日に校務DXチェックリストの自己点検結果の速報値が公表されました。この自己点検は、令和6年10月から11月頃に各学校及び学校設置者が回答したものです。

まず、学校設置者、つまり、教育委員会の回答結果についてです。ご覧のように、東京都全域平均よりも千代田区は上回っているものの、23区では7位という結果でした。課題としましては、⑦教育委員会主催の研修についてオンデマンド視聴を取り入れるなど、教員研修の在り方や方法、内容などをアップデートしていく必要があると考えております。また、セキュリティ対策を前提とした校務用端末のクラウド利用によるロケーションフリー化など、誰もがより働きやすい環境を整えていく必要があり、令和8年度のリリースに向け、現在、準備をしているところです。

次に、学校の回答結果についてです。東京都全域の平均得点よりも大きく上回っており、23区では2位という結果でしたが、1位の渋谷区さんとは100ポイント以上の差があることが分かります。本区の各学校では、授業中の小テスト等にCBTを取り入れたり、デジタルドリル教材を実施、採点したり、生成AIを校務で活用したりすることが課題として明らかになりました。

委員長

前半の今年度の取組報告と、ここでの報告をまとめますと、今後の展望として、学習指導要領の着実な実施と授業改善、発達段階に応じた情報活用能力の育成、情報モラルやメディアリテラシーの育成強化をするために、環境を整え、教員研修をアップデートしていきたいと思っております。

事務局からは以上です。

はい。ありがとうございます。

事務局の報告を踏まえ、生成A I ガイドラインの改訂検討委員でもあった佐藤先生から、ガイドラインの解説とともに、校務D X と生成A I について、本区に期待することをお話しいただければと思います。

佐藤委員

佐藤先生、よろしくお願いいたします。

はい。ありがとうございます。じゃあ、まず、教員研修とか校務についてお話をしたいと思います。

昨日、私は熊本県の天草市というところにおりました。こうやって先生たちは授業を見ながら、自分たちの意見をクラウド上で共有しながら、この授業はこうだ、ああだとやっているわけですね。千代田区ではその点いかがでしょうかということ、まず1点目です。

2つ目が、先ほど相場指導主事がお見せしていたオンデマンドで見れないかどうかみたいな話ですね。これは、三井先生の方が得意な分野なんですけども、研修を受けるというときに、知識の提供だけみたいな話、つまり、講義だけみたいな話だったら、もはやその場に行かないで、オンデマンドでいいじゃん、みたいな話なんですよね。それを、学校というのは、これまでの慣例に従って集めて、大講堂で研修をして、そして、半分以上の先生が寝ているみたいな話に結構なりがちだと思うんです。それよりも、東京は通勤時間が長いので、通勤時間にそういう講義を聴いてきて、学校に来たら、講義のレポートを打つぐらいにしていた方が、僕は働き方改革が進むんじゃないかなというふうに思いますし、集めるんだったら、学校で自分の教材研究をするとか、あるいは、少し早く帰って家族サービスをしたり、病院に薬をもらいに行くとか、そういったことを柔軟にやっていかなければ、多分働き方改革は起きないだろうというふうに僕は捉えております。それは、教育委員会がきちんとできるかどうかというのは、現在、岐路に立っているかなというふうに思うので、これまでのやり方を教育委員会がいかに見直せるかどうかということは非常に大きなことかなと思います。これは、校務も、研修も全般的に感じるところでございます。それが1点目でございます。

2点目でございますが、生成A I の検討会議に参加させていただきました。その中で、少し見解についてお話を申し上げます。

大体、毎年、6月、7月になると、「読書感想文コンクールで生成A I を使ってきてしまう生徒はどう思う？」みたいな、そういう取材を受けるんですけども、どうでもいいですという話で回答をずっとしています。これは、なぜかといいますと、そもそも読書感想文コンクールが教師の制御に従って全員やらなければいけないものなのか、本当にやりたい子どもがやっている

かで、大分変わると僕は思うんですね。本当にやりたい子は、生成A Iを上手に使って、自分の文章をブラッシュアップしていくと思うんですよ。でも、やりたくない人は生成A Iでさくっと終わらすわけですよ。

だから、ここにも主体性が関わっていて、生成A Iを使うときにはどうしたらいいですかと言われたときに、めちゃくちゃ大事なのはやっぱり主体性だというふうに僕は捉えております。自分の自己実現のために、どうすれば効率的にやれるだろう、どうすればもっと自分にはない発想を得ることが出来るだろうというふうに考えていない人以外が使うと大体ろくなことはないというふうに思いますし、自分以上の力を生成A Iが発揮してくれることは決してないというふうに思います。自分の力の中で今までやった作業効率を10やるところを2で終わらすみたいな話が生成A Iですし、自分の能力が100だったら80ぐらいでまず作ってもらうというのが生成A Iですから、100から120にするなんてことはほぼないんだというふうに捉えていただくのが、多分、正論なんじゃないかなというふうに感じております。

生成A Iの活用に関しては九段中等様が頑張っておられていて、文科省の成果報告会でも一緒に須藤先生とお話ししましたが、大変素晴らしい実践がされていたと思っています。これも先ほどの相場先生への話に関わっていきませんが、生成A Iを使っていくときに、子どもがやっぱり大事なことは情報活用能力の強化だというふうに思っています。これをやらないと、コピペが横行する状態と情報をうのみにする状態になりますので、これにプラス主体性なんですけど、主体性と情報活用はいかにどう関わっているかみたいところで、先ほど見解を示したとおりでございました。

最近、考えなきゃいけないと思っているのは、例えば、これは、1、2、3、4、全部、中学生が作ったスライドなんですけれども、このスライドで、生成A Iの活用に耐え得る生徒はどれなんだという話です。そうやってきたときに、多分、耐え得るのは、僕の中では1と4なんですね。2みたいな話というのは、ほとんどウィキペディアみたいな話だと思いますし、あまり意味がない活用だと思っています。いかにクリエイティブにやれるのか、情報を自分でいかに整理できるかみたいな、そういう姿を想像できないと、子どもたちの生成A Iの利活用というのはしんどいだろうなというような印象をもっているところでございます。

それから、ちょっと範囲を広げてになりますけども、生徒だけでなく、先生もきちんと使っていきたいということですね。もちろん、誰が最初に使っていくのかという話になるんですけど、やっぱり先生が使っていて、先生が日常で使っていく中で、生成A Iって、こういうもんだなという特徴をつかんでいく、感覚的につかんでいくことを通して、じゃあ、子どもにこういうふうやっていこうかなというアイデアが浮かんでくるわけで、この段階がない状態で、子どもたちに使わせていくというのは、まあ、やばいだろうなという印象を僕はもっておりますので、先生方が校務のD Xの中で、とにかくたくさん使っていくということが、多分、最初にあるんだと思

います。結構、生成A Iの肌感覚って、非常に大事だと思っていて、このタイプの生成A Iはここまでやれるんだとか、このタイプの生成A Iはこういうふうに使って結構ぽんこつだとか、いろんなことを知っていなきゃいけないわけですね。知っていなきゃいけないけども、C h a t G P Tぐらいしか知らないと、やっぱり、もはやうまく使えないんじゃないかなというふうに考えておりますので、まずは先生方がたくさん使っていくというような話だと思っています。

校務D Xのチェックリストの方は相場先生がもう示していただいたのでこちらは示さないとしても、生成A Iの方にもチェックリストがあります。教職員の校務の方はどんなふうになっているのかということですね。幾つか大事なことがあって、例えば、個人情報をプロットとして入力していないとか、そういったことになります。ほとんど出てこないと思いますけども、生成A Iに入力したものはどこかでまた出力されてくる可能性となるわけですよね。ですから、生成A Iには個人情報を入れないということが、一応、原則になっているというふうに思っています。

そういったことを踏まえて、児童・生徒の活動になっていきますので、まずは、先生方が日常で使っていくことをやっていただきたいと思えますし、何なら、先生方が教室で生成A Iを使っている、その姿を子どもが見るだけでも全然違うというふうに思います。あ、こうやって使うんだというふうになるじゃないですか。なっている中で教えるのと教えないのでは訳が違うという話ですから、先生方の周りにうまく生成A Iを溢れさせるということです。いずれにしても絶対やらなきゃいけないことであって、逃げては通ることが決してできない分野で、逃げた時点で日本や千代田区の未来はないというふうに考えていくのが筋ですから、どんどんどんどん使っていくことを推奨していただければなと思っております。

私からは以上となります。よろしくお願いいたします。

委 員 長

はい。ありがとうございました。

ここまでの報告等を受け、保護者代表の方からご感想などを伺えればと思います。

はじめに、岡野委員、お願いいたします。

岡 野 委 員

はい。ありがとうございます。

先ほどの佐藤先生の読書感想文の例は、非常に分かりやすかったです。私も生成A Iを使って卒業式の祝辞を昨年度作成したんですけども、まあ、味気がなくて、つまらなかったです。なので、変えたんですけども、やはり補助的に使うという意味では非常に便利なので、主体性をもって生成A Iを使う、読書感想文でそういうふうに行っている子どもがもし今いるのであれば、それは素晴らしいことだと、そんなふうに思いながら聞いておりました。

あとは、まさに、生成A Iを使っている姿を子どもたちに見せるというお話は、非常に効果的だなというふうに思っておりますので、ぜひ、教育の現

委員長

場で使っている姿を見せていただきたいなど、お話を聞いて思いました。

以上です。

はい。ありがとうございます。

次に、杉山委員、お願いいたします。

杉山委員

はい。生成A I のこと、私も業務で資料を作ったり、メールを作成したりということのときに、今、C o p i l o t とかは結構活用するようになりました。ただ、これをうのみにするというのはできなくて、やっぱり先生がおっしゃったとおり、自分でそれを取捨選択、ブラッシュアップしていくということが必要になってくると思うんですね。それを子どもたちも活用するときに、全部が正しいということのをうのみにしない、それをどう自分でうまいものをつくっていくかというのが重要になってくるんじゃないかなというふうに思います。その辺りは、やっぱり基本的な国語の能力とか、そういったものは先生のご指導によるものなのかなというふうに思っております。

委員長

はい。ありがとうございました。

ここまでの内容を受けて、校長先生方からコメントを頂きたいと思います。

初めに、小牧校長先生、お願いいたします。

小牧委員

はい。本校を振り返ってみると、校務のD X 化とかはとても進んでいるというふうに思っております。それは、会議の進行管理であるとか、あと、コミュニケーションを増やす。T e a m s なので、業務内でなかなかコミュニケーションが取りにくいけれども、チャットで先にコミュニケーションを取っておいて、より深いところを話すというような教職員の連携についても進んでいるかなというふうに思っております。

A I については、児童が使うということは、法律というか、まだ小学生が使うというふうにはなっていないと思いますので、今は、先ほどお見せした児童の実態とか、本校で取っているアンケート調査の分析をA I に任せています。その分析をまずA I がやった上で、もう一度、教職員が見直すというところを行っています。今までは最初から教員がやっていたんですが、その手間、そして、分析をより精度を上げていくために、このA I の利活用をしている段階です。以上です。

委員長

ありがとうございました。

次に、野村校長先生、お願いいたします。

野村委員

はい。まず、モラルについて、本校では生成A I を結構活用していますけれども、生徒は、生成A I の回答がそれは答えだと思っていないんですね。生成A I 、それが本当かどうかということをしっかりと見ていますし、自分が求める回答になっていないというのは、自分のいわゆる質問力が悪いんだと。質問を変えると違う回答が出てくるというのをもう体験していますので、自分の質問力をいかに上げていくか。そして、生成A I と対話をしていくということから、対話力が上がってくる。これは前回もお話ししたんですけども、やはりそういったところをしっかりと生徒は身に付けていると思い

ます。ですので、単純に生成A Iをコピペして、それで、こうですというようなことにはならない。逆に、コピペしていたのは教員も分かるので、その辺りについては、もう生徒はしっかりと把握できているかな。また、生成A Iの限界を試す子もいます。質問し続け、もうここは生成A Iは回答できないんだな、なんていうようなことを試す生徒もいて、それをみんなで共有をしています。そういった意味では、生成A Iは、もう結構、生徒も教育の中で、授業の中でも活用しているなというところがあります。

ただ、LINEの活用などでは、いろいろ写真を上げたりしてのトラブルとか、あるいはゲームをしていてというのがあって、それは、生徒同士で結構制御しているなというところがあります。大きな問題があれば、当然、教員も指導していかなければならないというところはあるんですけど、それは想定内のことかなと思ってはおります。生徒の自律、これは社会に出てからも必要なことになりますので、そういったことは引き続きやっておく必要があるかなと思っております。

あと、サイバーセキュリティの問題ですね。これは情報の授業の中で若干出てきてはいるんですけども、先般、イギリス大使館とコラボして、オールイングリッシュで授業を実施しました。サイバーセキュリティの授業を受けて、生徒が楽しく取り組んでいたんですね。中身についても、いろいろコンテストがあったり質問、課題が出たりして、それをクリアしていくという授業だったんですけど、非常にすばらしい授業だったと、情報の教員も話をしていました。今後、サイバーセキュリティ、そういったものをどうふうに取り組んでいくかというのが課題かなと1つ思っております。

それから、働き方改革という中で、校務でDXを活用してはいますけれども、特に、生成A Iではテスト問題の作成、これは教員がよく言っています。今まで1週間かかったものが、2〜3時間でできてしまうということで、非常に働き方改革になっていると。ただ、そのできたものをそのままではなくて、当然、教員がそこからよりバージョンアップしたものができてくる。逆に、生徒も、例えば九段の前期の中間テスト、こういったものに、過去こういったものが出ているけれども、次、予想されるのは、みたいなことで、自分でつくる可能性は出てくるんだろうなというのがありますので、それはそれで、教員もその上を、としてやっていかなければいけないんだろうなと思います。ただ、今、ただの穴埋めというか知識だけの問題ではなくて、それを使って、じゃあどう考えるのかというような質問に変わってきていますので、そこはより高度なものが必要で、知識があった上での高度な質問ができてくるんだなと思っております。

あと、例えばスピーキングテストなどでも、今まではずらりと、先生1人に対して、ずらりと生徒が並んで一個一個スピーキングしていたものが、自分が録画で撮ったものをアップして、それを、一度、生成A Iの中でセレクトでチェックしながら、それを教員が見るですとか、あるいはスペルチェックをするということになっていますので、この点も非常に有効活用を、今で

言うタイプというんですかね、有効活用できているかなと。

それから、教員が発信する文書、例えば学級通信ですとか学年通信とか、それは、校長が、最終的に私が赤を入れていくんですけども、こういった場面で赤を入れていくのかというのを、全部、生成A Iにもう読み込ませていますので、文書を教員が作るときにそういったチェックを受けた上で最終的に上がってきますので、私が赤を入れるのも大分少なくなってきたかなとは思っています。

この生成A Iなんですが、本校の場合には、例えばC h a t G P Tとかを使うというと年齢制限がありますので、簡単に使えない。本校では12歳から18歳までいますので、それを、制限をどういうふうにしているかということ、企業と契約して、うちの学校の中で生成A Iを活用した場合にその情報が外に出ない、いわゆる個人情報間違えて入れたとしてもそれが表に出ないというような契約をしています。また、生成A Iを使うときには、外からの情報が入ってくるというようなことをしておりますので、安全面というか、例えば、いわゆる、いろんな文章とか、ほかの論文を使ったりしたときに、そういったものの問題が出ないようにというようなことをしております。著作権ですね、そういったこともしておりますので、安心して使えるというのが1つ大きなところかなと思っております。

それから、生成A Iについては、いろんな授業で使っております。例えば、この間、文部科学大臣が訪問された際には、古典の授業で今現在の情景にしたらどういう情景になるのかということを生徒自身が考えるというような授業をしておりました。そこでもうまく生成A Iを使いながら、画像にしたり、動画にしたり、今の生徒はすごい能力が高いんだなと思いました。

今後の課題ですけども、まずは、ダッシュボードについての研究というのはこれから本校でも取り組んでいこうというようなこともしております。ただ単に、こういう結果でした、テストがこうだったのでどうですということではなくて、双方向でのダッシュボードの活用というのが必要になってくるかなと思っております。

それから、生徒には、こういったI C Tに関するものは文具だということで、常に日頃から使うようにと言っていますが、先ほどのモラルの問題ですね。本校では、スマートフォンを持つ、持たないは家庭の問題だということと言っていますが、それを授業の中で活用することはいいよということで、1年生から6年生まで活用オーケーになっております。けれども、より一層、社会に出てからというか、学校を出た後での活用の仕方、そういったこともしっかりと各自考えてもらう必要があるということで、ますますこういったモラルに対しての指導もしていく必要があるかなと思っております。

あと、オンデマンド、オンライン授業ということで、本校ではオンライン授業をもう全て、何かあった場合に、例えば台風とかで、今まででしたら休校というようなことをやっていたんですけども、そうではなくてオンライ

ン授業に切り替えるということをしておりますので、本校ではもう学校を休校するということはしていません。そういった中で、よりオンデマンドでもできるような形での授業、授業を録画して、それを後でも見られるようにしておくとか。ただ、外部の講師の先生が来た場合には、いわゆるこれこそ著作権の問題が出てきますので、オンデマンドの配信ができるかどうかというのは、その講師の先生の許可を得ながらということで、校内研修でもそういったことで生かしております。ただ、会議については、いわゆる企画調整会議という、分掌主任が集まった会議があるんですけども、そういった中では、私の資料もすぐに全ての教員が見られるところにアップしておりますので、私の話なども動画にしてアップすれば、私が言っていることが全部又聞きではなくて直接聞けるので、そういったことも今後できていくかなと思っております。

非常に素晴らしいツールですので、これを活用して、個別最適、それから、協働的な学び、これは本当に有効なんだなということを痛感しておりますので、ますます利活用しながら、より高度なものにしていきたいと考えております。以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。

盛谷委員

最後に、盛谷校長先生、お願いいたします。

はい。まず、校務DXですけど、スタディサプリなどは、生徒がそれぞれのペースで学ぶという意味で活用しているのですが、今後、小テストの部分で、CBTの活用をできる限り進めていくと、これも働き方改革の流れかなというふうに思っています。ぜひ、教育委員会には、先ほど話がありましたリプレースの際にロケーションフリー化をやっていただいて、教員が、もちろん職場で働くのが前提ですが、家庭でもいろんな仕事ができるような状況をつくっていただけると非常にありがたいと思っております。よろしくお願いいたします。

先ほどのAIですが、本校でも数学の教員が先んじて、生徒の振り返りシートへのコメントに対する教員側のコメントをAIでやろうと取り組んでいます。そういうスタートになる教員がいると進んでいけるのかなと思います。先ほど野村校長先生からありました、様々な活用のアイデアというのもありましたけれども、教員側の意識の改革、柔軟になっていけばいくほど活用が進むのかなと、聞いて思っていました。ぜひ、今後できる限り校務のほうも生成AIを活用しながら進めていきたいと思っております。以上です。

委員長

はい。ありがとうございます。

次に、三井先生から諮問及び論点整理のICTや授業改善等に関する内容から、本区に期待することをお話いただければと思います。

三井先生、よろしくお願いいたします。

三井委員

はい。よろしくお願いいたします。ここは、来年度へ向けてということで、来年度、じゃあ、どういうふうに授業をつくっていけばいいのか、そういった点に資するような情報が提供できればなと思っております。

ご存じのとおり、年末、12月に次期学習指導要領へ向けた諮問が出されております。諮問を受けて、今、中教審の方で議論が開始されて、答申という形で返され、次の学習指導要領がつくられていくといったプロセスだと思います。だからこそ、こういった諮問に述べられていることを踏まえた上で授業を改善していくということが欠かせないのかなと思っております。この諮問の中で、今現在の学校教育の課題を文部科学省は3つに整理しています。

その1つ目が主体的に学びに向かうことができない子どもの存在ですね。よく言われる、主体的に学びに向かうことができていない子どもの増加といったことがあるんですけど、これは、子どもだけの問題にしてはならないんじゃないかなと思います。「主体的に学びに向かえないのは子どもが悪い。以上」みたいな形になってはいけないわけですよね、当然。じゃあ、子どもが主体的に学びに向かえる課題設定がなされているのか、授業デザインになっているんだろうか。つまり、教師側の改善点みたいな点で踏まえていくと、もっともっと課題の設定の工夫ができると思いますし、授業デザイン自体も、子どもたちが主体的に学びに向かえるような授業デザインにしていかなければならないのかな、なんてことがとても大事だと私は感じています。主体的に学びに向かえないのは、そもそも主体的に学ぶような授業デザインになっていないということが実は多々ありまして、子どもに選択決定の余地がないのに主体的に向かうって、なかなか難しかったりすると思いますし、解決する必要性も必然性も感じないような課題の中で、主体的に学びに向かうって、なかなか難しいとするならば、やっぱり、こういった指摘から教師が授業改善をどういうふうに行っていけばいいのか、どうやって行わなければいけないのか、みたいなところも見えてくるのかな、なんてことを感じています。

2つ目としましては、ここに書かれているような習得した知識を現実の事象と関連付けて理解したりとか、概念として知識の習得とか、深い意味理解をしたりするということがやっぱりまだまだ足りていないよということが指摘されています。これって、まさに、今日の議論にも上がっている情報活用能力ではないかなというふうに思っております。情報の収集、インプットですよ、整理や分析をして、そして、それをまとめて表現するみたいなところを、あえて違う言葉で言うと、インプットをして、エディットですね、編集をして、そしてアウトプットみたいな形になっていくと思うんですけど、こういったことをより一層意識していくということが、当然、千代田区にとっても大事なのかな、なんてことは思っています。

この学びのイメージ図で考えてみると、一番下にデジタルの学習基盤がありますよね。これは、もう、1人1台とかクラウドということが当たり前にある環境の中で、自分が欲しい情報を手に入れる。それがインプットだとするならば、それをそのままアウトプットするのではなくて、自分なりに解釈したり新しい角度から編集してみたりということが欠かせないんじゃないかなと思います。そういったときに、思考方法として、この情報って、つまり

何を言っているんだろうかといったような抽象化や概念化が必要ですし、本質を明確化するために、そもそも、これって、どういうことなんだろうみたいな点で情報を見ていくということは欠かせないのかなと思います。そういったところで、編集した、エディットした情報を分かりやすく表現する、アウトプットすることこそが、先ほど指摘されていたような現実の事象との関連付けとか、概念としての知識の習得とか、深い意味理解につながっていくと思います。これは、校種を問わず言えると思いますし、教科を問わず言えることではないかなと思います。

まさに、こういった、自分なりに編集していく、エディットしていく力こそが、先ほど佐藤先生がお示ししたような生成AIと戦えるのはどれだ、みたいな形ですね。そういったところで、生成AIによく分からないまま投げたときによく分からないものが来て、それをそのままアウトプットしているようでは、やっぱり情報活用能力という点でも弱いのかな、なんてことを思っていますので、ぜひ、こういった、「つまり」、とか、「そもそも」みたいな形の思考法で情報を当たって、自分なりに解釈したり、新しい角度から編集できる子を育てていってほしいなと思っています。

もちろん、こういったことが可能になるのは、周りを取り巻くような先生のフィードバックとか学級経営とか魅力的な課題とか、そういったところも欠かせないと思いますので、併せて、先生方の働きかけ、授業デザインとして意識していく力になるということでもあります。

3つ目が、デジタル学習基盤の効果的な活用です。これは、デジタル学習基盤というものは、もう、デジタルはツールではなくて、当たり前にある環境なんだということのメッセージではないかなと思っています。こうしたデジタル学習基盤の上に子どもたちの学びはもちろん、先生方の学びや校務があるんだと思います。より一層、このデジタルの学習基盤をフル活用して、子どもたちの学び、先生方の学び、そして、校務を充実していくということが来年度以降の課題になってくるのかな、なんてことは思っています。

こちらも中央教育審議会の諮問に述べられているものです。ここでは、各教科等や目標の在り方について、大きく3つ示されています。これは、審議事項として述べられていることなんですけど、これこそが次の学習指導要領に向けての重点ポイントなのかなと私は捉えています。

1つ目が情報活用能力の抜本的な向上です。情報活用能力を向上させるんじゃなくて、抜本的に向上させると書かれているとおり、これはかなり強い言葉ではないかなと思います。裏を返すと、十分ではないということです。だからこそ、千代田区においても抜本的向上というところまで行かない、そこまで必要ないかもしれませんが、でも、こういったことが指摘されているからこそ、本当に今の情報活用能力でいいんだろうかとか、さらに高めていかなきゃいけないんじゃないだろうかという点で、カリキュラムであるとか、日々の授業なんかを見直してほしいな、なんてことは思っています。

2つ目が質の高い探究的な学びです。この探究的な学びも、これまでも言

われてきたことなんですけど、枕言葉がついています。「質の高い」。じゃあ、この「質の高い」って何なんだろうみたいなことは追求していく必要があると思いますし、千代田区において、この探究的な学び、質の高い探究的な学びって、こういうものだみたいなところを捉えた上で、じゃあ、各校で実践を進めていくということが欠かせないと思います。

3つ目は文理横断・文理融合といったところです。これは、文系だから、理系だからといった枠組みではなくて、文理を融合していく。小中学校でいったら、これは教科横断的なところだと思いますので、ぜひ、そういった点でも、算数は算数、数学は数学という垣根の中だけではなくて、それを横断するような見方や考え方を発揮できるような場であるとか、カリキュラム編成とか、総合的な学習の時間とか、総合的な探究の時間とか、そういったところの充実へつなげていくということが大事だと思います。

結局、今、こういった諮問で出されていることが次の学習指導要領につながってくると思いますので、ぜひ、こういったところをキャッチしながら、千代田区の教育がさらに前進していくことを期待したいと思います。

私からは以上です。

委員長

三井先生、ありがとうございました。

ただいまの先生のお話を受けて、保護者代表の方々からご感想を伺えればと思います。

はじめに、原委員、お願いいたします。

原委員

はい。今、三井先生のお話を聞きまして、情報活用能力の抜本的向上を図る方策と、質の高い探究の学びというところで感銘を受けました。文理横断という言葉と文理融合という言葉、とても大切ではないかなと感じました。うちの娘も、4月から中学生になるんですが、やっぱり算数だけできても、国語力がないと文章問題が解けないとか、そういうところで、ちょっとつまづいているところがありましたので、その辺の学習能力の向上の仕方とかを、しっかり生成AIも利用しながら、自分自身にもつなげていけることになっていけばいいなと感じました。以上です。

委員長

原委員、ありがとうございました。

続いて、杉山委員、お願いいたします。

杉山委員

はい。ありがとうございます。ICTを活用することによって、子どもたちが楽しく、そして、自主的に学べるようになるといいなと。あと、先生方の働き方改革につながっていくようになっていけばいいなというふうに思っています。

ここで、学校からヒアリングしたことをお伝えさせていただければと思います。

麹町中学校、年末からインフルエンザが大流行したということで、12月から今も、ずっとオンラインでの朝礼とか、生徒会の朝礼も行っているということを聞いております。あと、ランチタイムとかにお昼の配信をして、委員会とか、こういった配信も行っているというふうに聞いております。ICT

サポーターが週に一、二回来ていただいているということがとても先生方の役に立っているということをおっしゃっておいりましたので、引き続きお願いしたいということです。

あと、アプリなども、他区に比べて、とても豊富に入っているということなので、この環境も今後も継続していただければなというふうに聞いております。

課題とおっしゃったのが、LTEの20ギガという問題があるそうなので、こういったことも、引き続き、課題としてあるというふうにおっしゃっていました。以上でございます。

委 員 長

杉山委員、ありがとうございました。

最後に、岡野委員、お願いいたします。

岡 野 委 員

はい。三井先生、ありがとうございました。審議会諮問の内容を、すみません、知らなかったので、ご教示いただきまして、大変ありがとうございました。

子どもたちが主体的に学びに向かうことができないという点について、私が聞いていて思ったのは、じゃあ、家庭教育で何ができるかな、なんていうことを考えながら聞いておりました。学校教育の現場では、このように大学の先生や校長先生、教育委員会を含めて、いろいろご尽力いただいているので、じゃあ、家庭教育で何ができるかなというところで、親の目線もやっぱり現代の教育にシフトチェンジしていかなきゃいけないのかな、なんていうのを感じました。過去の、いわゆる自分たちが教わってきた教育と現在の子どもたちが受けている教育が違うこと、そして、何が問題であるというのを親がまず把握して、家庭の中で子どもたちとの接点をもつ中で、ちょっと評価基準と言ったら変ですけど、目線を変えて子どもたちに接することでやっていけたら、より子どもたちの学習のサポートができるのかなというふうに思います。

じゃあ、何ができるのかというのは、多分、家庭それぞれだと思うんですが、少なくともこういった情報を頂いたものを保護者間で共有させていただきながら、学校任せにならないような姿ができたらなと、こんなふうに思いました。

以上です。

委 員 長

岡野委員、ありがとうございました。

続いて、校長先生方からもコメントを頂きたいと思います。

はじめに、盛谷校長先生、お願いいたします。

盛 谷 委 員

はい。ありがとうございます。

先ほどの話とつながるのですが、本校の研究の中で、主体的に学びに向かうことができない子どもの増加というのが挙げられていましたが、なかなか難しい生徒がいるというのを把握しています。それは、先ほどの話のとおり、教員がどうやってそれを高めていくかというところに、やはりシフトしていかなきゃいけないと思っています。研究を通して、本校の課題というと

ころがかなり分かってきたところもありますので、次の研究の中心に当たる部分もあるのかなと思っています。また、主体的に学びに向かえないという子どももいれば、様々な特性をもった生徒もいる中で、一斉に授業をやるのでもやっぱり限界がありますから、それぞれの生徒に合った形で最適な学びをどう教員側が提供できるかという視点を、今後も高めてい思っております。以上です。

委 員 長

盛谷校長先生、どうもありがとうございました。

次に、小牧校長先生、お願いいたします。

小 牧 委 員

はい。三井先生、ありがとうございました。

先ほどの諮問にあったように、学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ばというところで、現在の事象と関連付けることと、深い意味理解をすること、あと、自分の考えをもち、根拠をもって明確に説明すること。これは、まさに、うちが今年度、そして来年度、研究でやろうとしていることかなというふうに思いました。引き続きICTを推進していきながら、子どもにこのような力を身に付けさせていきたいなというふうに思っております。

以上です。

委 員 長

小牧先生、どうもありがとうございました。

最後に、野村校長先生、お願いいたします。

野 村 委 員

はい。ありがとうございます。

本校では、私が来てからは、リベラルアーツということで、文理融合が必要なんだということで、教育のカリキュラムも徐々に変えてきています。特に、今年度の共通テストを見ていただいてもお分かりになるように、例えば、化学の中の選択肢にいわゆる古典が入っているですとか、今までも、国語のテストの中に英語の選択肢が入っていたり、あるいは英語の長文の中で保健体育、これはもう都立高校の入試などにもあったんですけども、英語の中身が保健体育に関すること、あるいは理科に関することということで、もう、その教科だけの知識や思考だけではいけないというようなことになっているかなと感じておりますので、こういったことが重要なんだなと思っております。

そういった意味ではいろんな授業の内容も含めながら展開していく必要があるかなと思いますけど、本校では今年度から九段探究プランというのを始めています。この九段探究プランは、グローバル、STEAM、アントレプレナーシップ、この3つの柱でやっております。特徴なのが探究プランを主軸に押さえて、その周りを螺旋のように授業があるんだというような考え方をしております。各教科で習ったことの中軸を、それを踏まえた上で未知の問題に取り組んでいくという、今後、こういったことが必要なんだろうなと考えております。

そして、そのベースには教育DXがあるということで、生徒がいかに利活用しながら、より高い教育内容にしていくかというところにあるのかなと。学習課題を考えていくのが非常に大変だと思うんですけども、そこは教員

が寄り添いながら、あるいは教員が専門ではないような課題を取り上げてくる生徒もいますけども、そこはもう、どうしても教員としては自分の範疇、知っていることの中で取り組んでもらいたいというのがあるので、テーマは教員が与えるというのが今までの傾向だったんです。そうではなくて、これから、課題を生徒自身が考えていく、それに教員が寄り添って一緒に考えていくということが多分必要なんだろうなと思います。そういった意味では、より効果的に教育D X、これを活用していくということが必要になるんだろうなと考えております。

以上です。

委 員 長

野村校長先生、ありがとうございました。委員の皆様、活発なご意見をありがとうございました。

さて、本日は、それぞれのお立場から様々な貴重なご意見を頂きました。これらを受け、教育I C T推進の統括的な所管として、上原指導課長より、総括的なコメントをお願いいたします。

指 導 課 長

はい。それでは、1時間半にわたって、委員の皆さん、ありがとうございました。様々にご意見いただきまして、また感想、ご指摘も頂いたところかというふうに思います。

まず、本日いらっしゃる3校の取組というところは、本当に有意義で大変有効なものであって、本区のI C T教育を推進する上では、非常に参考になる部分であるかなというふうに思います。熱心に研究を進めていただいていること、本当に感謝を申し上げます。ありがとうございます。また、それぞれの取組だけに終わらず、しっかり発信をしていただいているということも、非常にこれはありがたいところかなというふうに思います。

神田一橋中学校で先週発表いただきましたけど、まだまだ研究は進んでいくところかなと思います。ぜひ、引き続き、それぞれの取組を発信いただいて、本区のI C T教育の推進にご尽力いただければというふうに思います。

また、有識者の先生方からは、様々にご指導、ご指摘いただきました。また、学びも多かったです。今後の学習活動の在り方等のヒントを頂いて、教員の制御の話も非常に興味深いと思いました。また、様々、意図的に何かに取り組んでいくことということが非常に大事なんじゃないかと思いました。何となくI C T教育を推進していこうとかリテラシー教育を推進していこうというんでは、どうにも推進できないと。何かしっかり意図的な取組があるからこそ明らかに変わっていく姿が見えて、推進されていくんじゃないかなというふうに思います。また、無意識化している部分というところも改めて感じさせていただきました。意識化することも、再意識化ですね、ということも非常に大事なかなというふうに思います。

次年度に向けて、指導課としても、ちよだスマートスクールの推進と、また、ちよだリテラシー教育というところで、各校の教育課程にぜひ位置付けてほしいというところで、重点項目として挙げさせていただきました。それらは決して新しい取組というわけではなくて、これまでの教育活動という

ころを、先ほどの意図的に整理することで、大事にすることが見えてきたんではないかなというふうに思います。

本日お話しいただいた中で、教育委員会としても幾つか宿題を頂いたのではないかなというふうに思います。令和8年度にリプレースがありますが、それに向けて、次年度、令和7年度は、様々に検討を重ねていき、これまでの成果と課題をしっかりと踏まえて、令和8年度のリプレースに臨んでいく必要があるかなというふうに思います。

また、事務局のほうから、今後の展望として10個の内容を挙げさせていただいたんですが、この方向は本日お話しいただいた中でも間違っていなかったんではないかなというふうに改めて思うところです。

教育委員会として主導すべきところもありますが、学校との連携は決して欠かせないところはあるかなというふうに思います。そういったところをしっかりと整理しながら、確実に今後も進めてまいりたいというふうに思います。

引き続き、委員の皆様には、ご意見だとかご指摘、ご指導を頂戴できればというふうに思います。本日はありがとうございました。

委 員 長

上原指導課長、ありがとうございました。

今年度、委員会として皆様にお集まりいただくのは、今回が最後となります。来年度の進め方については、会議方法なども含めて、現在、検討中でございます。引き続き本区の教育ICT推進にご支援いただきますよう、お願いいたします。

それでは、以上をもちまして、令和6年度第2回千代田区教育ICT推進委員会を閉会とさせていただきます。皆様、ありがとうございました。